

命をつなぐ

小児がん

治療の

現場から

「子どもに対しては正式な名称である『小児がん』という言葉を使用せず代わりに『病氣』や『病氣の治療』という言葉を使って話してください」。これは、小児がんと診断されたお子さんたちの保護者に、病名や治療内容、そして生存率について詳細に説明した後、多くの家族から発せられる言葉です。

小児がんの子どもに、『がん』である、と正しく告知することは非常に重要です。診断後の治療は入院で半年以上におよびます。慣れ親しんだ幼稚園や学校に行けなくなり、免疫力の低下に伴う発熱や、吐き気、抜け毛などの副作用とも子どもたちは闘います。この長い治療期間を告知なく乗り切ることが極めて困難です。正確な情報を与えることで、子どもは自分の状況を理解し、治療や病氣との向き合い方をより良く理解することができます。

また、がんであることを知ること、ショックを受けるかもしれませんが、子どもは自分の感情を表現することができます。感情的なサポートを家族や医療スタッフから受けることで、彼らはより強くなり、病氣と闘う勇氣を持つことができます。そして子どもは治療や生活の調整に協力しやすくな

小児がんの告知

正確な情報提供が不可欠
病氣を克服する勇氣に

ります。

医療スタッフとのオープンで正直なコミュニケーションを通じて、信頼関係が構築され、共同で治療やケアの計画を進めることが可能になります。さらに、がんという病氣について理解することで、子どもは未来への希望を持ち、治療への積極的な姿勢を保つことができます。治療終了後、がんを克服した後に生じる晩期合併症に対する自己の健康管理能力の向上にもつながります。再発や治すことが困難になった場面では、彼らは自身の健康に関する選択肢を理解し、それに基づいて決定を下します。

実際には親や家族と協力して告知のタイミングや方法について話し合います。医療用語や難しい言葉は避け、子どもが理解しやすい言葉で説明します。例えば、幼稚園児以上であれば「治療しなれば負けてしまう、死んでしまう病氣」という伝え方です。

治療の必要性について説明したあと、子どもたちに尋ねます。「どうする?」。答

えは明白で、30

年に渡り小児がんの子どもたちを見つめてきましたが、「治療はしたくない」と答えた子どもは誰一人いません。

